
機動戦士ガンダム0083—もう一つの星の屑—

大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0083―もう一つの星の屑―

【Nコード】

N4459Y

【作者名】

大根

【あらすじ】

連邦軍の落ちこぼれ兵士ランドは、ガンダム試作二号機の奪取に、偶然にも居合わせてしまったことで、宇宙世紀の闇に消された。

『デラズフリート』

の反乱に、巻き込まれていくことになる。

トリントン基地強襲直前（前書き）

エーッと、新作で、偉そうなタイトルを着けていますが、内容は屑です。

風邪を引きながら書いたのでかなり間違いが有ると思いますので、良ければ、ご指摘、アドバイスをして頂ければありがたいですm（
ー）m

トリントン基地強襲直前

第一部

雄大に広がるオーストラリア大陸

しかし、その雄大さには、会わない物がその大地のあちらこちらに突き刺さっている。

モビルスーツは愚か、戦艦よりも巨大な破片。

一年戦争において、ジオン公国が行った、コロニー落とし。

『ブリティッシュ作戦』の傷痕である。

かつてコロニーが落ち、オーストラリアの首都、シドニーが丸々消え去った場所。

直径100kmにも及ぶ、最大の人口のクレーター

かつての面影を全く残していないそこで、幾つかの影が破片の周りを飛び交っている。

???1「あ、当たってくれ！」

気弱な声と共に、ザクからマシンガンが発射される。

目的は、前方のジムタイプだ。

しかし、ジムタイプは、空に飛び上がり、降下しながらマシンガンを撃ってくる。

???1「う、上からー!!」

立体的なその動きについていけず、マシンガンがザクに当たる。しかし、ザクは被弾もせず、ピンク色のペイントが着くだけだ。

実戦なら、確実に撃破されているであろう。

「???2「おいおい。新兵さんは士官学校でお勉強をしなかったのか???」」

ふざけたように言う低い声が響き、ジムタイプは攻撃をやめる。

「???1「クッソー！まだ勝負は着いてませんよ！」」

ザクは、マシンガンを構え、ジムタイプに突っ込んで行く。

「???1「48・・・49・・・50・・・終わったあああゝ！」」

そう言いながら、腕立てを終えた若い男は、地面に突っ伏す。

「???2「ランド。もうへばってんのか？」」

そこに、低い親父声が響く。

ランド「カレント隊長！だ、大丈夫ですよ」

カレントと呼ばれた中年の男性は、やれやれと言いながら、去っていった。

ランド「クッソー！後少しだったのに！」

模擬戦でカレントに負けたランドは、罰として、腕立てをさせられ

たのだ。

?????3「ランド。お前また隊長に負けたんだろ!? ざまあねえな。」

男は笑いながら、未だ地面に突っ伏しているランドを嘲笑う。

ランド「アストン! う、うるさい! お前だって隊長に勝ったことな・
・あるか・・。」

ランドは、強くいかけたが、直ぐに言葉を濁してしまう。

アストン「俺様はエリートだからな! 落ちこぼれランドよお」

徹底的に罵倒してくるアストン

ランド「ぐぬぬぬ・・何も・・言えない・・。」

事実を言われランドはさらに塞ぎ込んでしまう。

アストン「じゃあなあゝ! 落ちこぼれ醜男ランドゝ。俺はこれから
これなんだよ?」

アストンは、小指を立てながらゆっくりと去っていった。

ランド「くそう・・好き勝手言いやがって!!」

2人の因縁は、士官学校時代まで遡る。

アストンは、代々軍人の家系に生まれた。

さらさらの金髪に甘いマスク、モビルスーツの操縦も一級品で、性格意外はパーフェクトといってもよい男だった。

士官学校を首席で卒業。

将来を約束されたエリートだった。

それに引き替えランドは、普通の家に生まれた次男坊。

黒い髪も適当に耳の辺りまで、切っただけ。

元気はあり、モビルスーツの操縦もそれなりに出来るのだが、いざと言う時何も出来ない。

要するにヘタレだ。

顔はそれなりにイケメンで優しい性格をしているが、お洒落等には興味が無く。女性に全くモテない灰色の人生を送っていた。

士官学校を落第すれすれで卒業した、『落ちこぼれ』である。

この2人は、オーストラリア、トリントン基地でテストパイロットとなる。

エリートと落ちこぼれ。両極端な2人が会うはずが無く、アストンは、何かとランドを見下しては鬱憤をはらしていた。

以上が、ランドとアストンの因縁の経緯である。

ランド「・・・帰るか・・・」

ランドは落ち込みながら、宿舎へと向かうのだった。
「???3「見るよキース。ペガサス級だぜ!」

キース「コウ。言われなくてもわかってるよ。」

すると。途端に辺りが騒がしくなり、光が遮られる。

ランド「な、なんだ！」

ランドはあわてて振り向き、言葉を失った。

空には、巨大な戦艦が浮かび、いままさに降りて来るところであった。

ランド「嘘だろ・・・ペ、ペガサス級！」

かつて、連邦の白い悪魔を載せていた艦と、同じ系列の艦が、ランドの前に降り立ったのだ。

コウ「おい、キース！見に行ってみようぜ！」

キース「マジかよ！？・・・わかったよ！」

コウと呼ばれている黒髪の青年と、キースと呼ばれているメガネの青年が、降り立って来た戦艦に行こうとして、ジープに乗る。

ランド「あ、待ってくれ。おれも載せてってもらえないか？」

ランドも居ても立ってもいられず、2人に話しかける。

コウ「別にいいぜ」

キース「お前も物好きだなあ」

ランド「サンキュ・・・よし、いいぞ。」

ランドはジープに乗り込む。

コウ「よし、じゃあ行くぞ」

コウは、3人を載せた。ジープを戦艦に向かって走らせた。

トリントン基地強襲直前（後書き）

相変わらずの駄文ですいませんm（――）m
前作でご指摘を頂きましたが、作者の技量不足により、全く進歩していません。

ランドは、アルビオン隊に入れるつもりなので、強引にコウやキースと絡みを入れていますがそこは許してくださいm（――）m
アストンは・・・どうしましょうか？

勢いで書いてしまいましたので（・・・）

何かよいアイディアがあれば、よろしく願いますm（――）m

ガンダム強奪(前書き)

更新遅れてすいませんm(____)m
達の悪い風邪でした？

相変わらずの駄文ですが、良ければ コメントお願いしますm(____)m

ガンダム強奪

ガタガタと音をたてながらジープがペガサス級に乗り上げる。

コウ&キース&ランド「……………」

3人は言葉を失った。

目の前には、伝説とまで言われた、ガンダムタイプのモビルスーツがたっていたからだ。

コウが一番に口を開いた

コウ「やっぱりガンダムだ……」

キース「あ……お、おいコウ！見ろよ！」

そう言つてキースが右の方を指差す。

コウ「ガンダムが2機も……」

そう言つて2人はジープを降りて、ガンダムに近づく。

コウ「こっちはコアファイター付きだ。あっちのも凄いな。見ろよあの重装甲」

キース「見れば解るよ」

ランド「……………」

ランドは呆然としながら、それを見ているしか無かった。

すると、キースがメカニツクらしき女性に声を掛け、言い寄っている。

コウは相変わらず、ガンダムにご執心だ。

ランド「（キースって言ったっけ・・・手が速いなあ・・・デカっ！なんだあの人！大の男よりデカイぞ）」

キースが大きい女性に絡まれている。キースと並んで、頭一つ文以上大きいだろう。

ランド「（あ、負けた。キースなんか凹んでる）」

どうやらキースは惨敗したようだ。

ランド「なんか和むな」

人の不幸は蜜の味、というやつだ。

キース「コウ・・・帰るぞ」

コウ「待てよ。もうちょっと見てようぜ！」

キース「俺はご傷心なんだよ。」

2人がジープに向かって来る。

ランド「んっ？、ジムタイプか？」

2機のガンダムの向こうに、1機のジムタイプが見える。

ランド「（デカイバックパックだな・・・）」

一見パワードジムに見えるが、何かが違う。

ランド「（何なんだ、あの機体？どこか・・・）」

キース「コウ、帰るぞ」

コウ「わかったよ・・・そう言えば君は・・・ランド・・・で、合
ってるっけ？」

コウがランドに向かって聞いてくる。

ランド「ああ、あってるよ。ランド・シュバイツ。階級は准尉だ。
お前らはコウとキースだっけ？」

一応3人とも、同期なので、名前は知っているようだ。

コウ「ああ、俺はコウ・ウラキ。階級は少尉。呼び方はコウでいい
ぜ」

キース「俺の名前はチャック・キース。同じく少尉だ。キースって
呼んでくれ」

同期だが、あまり面識は無かったようだ。

ランド「ああ、改めてよろしくな。取り敢えず、夕飯に行くか？親
睦を深めるのも大事だしな。」

辺りはそろそろ暗くなつて来た。

コウ「そつだな。同期同士仲良くしようぜ。」

キース「腹も減つたしなあ。行くか」

そう言つて、3人は夕飯へと向かうのだった。

コウ「人参要らないよ・・・うえっ」

コウが食事をとろうとする。人参はたくさん入れられたようだ。

ランド「子供かよ!」

ランドは思わず突っ込んでしまった。

キース「げっ!」

キースが何か行つたので、そつちを見ると、キースがあしらわれたメカニックの女性と、大きなメカニックがいた。

ランド「（確か、モーラ・バシット中尉と、ニナさんって言つたっけ）」

すると、コウがいきなり話しはじめた。

コウ「そうだ。ガンダムの反応速度は0・5、ぐらい早く・・・」

コウは何かぶつぶつと話している。

ランド「（二ナさんって、美人なんだけどなにかなく、コウも、何でそんな話しかないんだよ。）」

コウ「・・・それで、あの重装甲の奴は、対核兵器用で、肩のバズーカは戦術核装備だろ？」

二ナ「えっ！」

二ナは相当驚いている。

いきなり、見破られたからだろう。

ランド「核だつて!？」

ランドも驚いている。

核兵器使用は南極条約で禁止されているのだ。

ランド「本当なのかよ・・・あ、そう言えば、あのジムタイプは何なんだ？パワードジムとは何か違うし・・・」

モーラ「あれは、パワードジム改。パワードジムのバックパックをより、高性能のに変えて、装甲の一部をルナチタニウム製にした物。ガンダムにより近いデータをとるために、改良したのをジャブローから持ってきたのさ」

そうモーラは説明をしてくれる。

ランド「へえ、なんか凄いな。」

モーラ「確かにね。手間のかけ方が半端じゃないね。二ナ、いこうか。」

そう言って、二ナとモーラはどこかへ言ってしまった。

ランド「ジャブローも随分金つかってんだな。」

キース「確かに、あんなに手間かけるなんてな。けど俺たちには関係ないさ。」

コウ「まあな。新型は多分、バニング大尉がアレン中尉が乗るんだろ?」

ランド「あの2人が基地の1番と2番だからなあ。まあ良いや。さつさと食おうぜ」

3人は取り敢えず、夕飯を食べる事にしたのだった。

コウ「なあ。もう一回ガンダムを見に行こうぜ。」

夕飯の後片付けをすませると、コウがそんなことを言ってきた。

ランド「またかよ。まあいいけど」

キース「俺は勘弁しときたいんだけどな・・・わかったよ」

3人は再び、ペガサス級へと向かった。

その頃、基地に一台の車が入ってきた。

これが、未曾有の大惨事の始まりになるとは誰も、思いもしなかった。

キース「あれ、なんかやつてるみたいだな？」

重装甲のガンダムに、メカニック達が、何か作業をしているようだ。

二ナ「あなたたち！ここは立ち入り禁止のはずよ！」

3人は二ナにばれて案の定怒られてしまった。

コウ「もしかして今、弾頭装備中なのかい？」

コウが大声で、二ナに訪ねる。

二ナ「ええそうよ。だから邪魔にならないように、出てって頂戴！」

そういつて、二ナは作業に戻ってしまう

キース「彼女、あのトゲトゲがなけりゃ最高なんだけどな」

ランド「激しく同意」

コウ「もう諦めろよキース。嫌われてるぜ。ハッキリ言っ

キース「わかってるよ〜んなこと。帰ろ〜帰ってやけ酒付き合えよな！」

コウ「さてよ。もう少し良いだろ」

キース「だ〜めだ。」

ランド「（不味い・・・）じゃあ、また明日。」

何かを感じ取ったランドは早々に逃げようとする。

キース「まて〜にげるな。お前も来るんだよ〜。同期だろ」

コウ「わかったよ。ランド、お前も道連れだ。行くぞ」

しかし、あっけなく捕まってしまう。

ランド「うえ〜、わーったよ」

こうして2人は、キースのやけ酒に付き合う事になった。

コウ「あっ！」

前方から、上官らしき士官が歩いてくる。

ザッ

と3人とも敬礼をする。

すると、向こうも敬礼で返してくる。

ランド「（見たことない人だな？ペガサス級の人か？）」

???「素晴らしい。見事なモビルスーツだ」

コウ「自分もそう思います」

コウは生真面目に、そう答える。

???「君？バズーカに弾頭の装備はすんでいるのかね？」

コウ「は、はい？」

???「では、試してみるか・・・」

そう答えると、士官は、ガンダムタイプのコックピットへと登って言った。

ランド「???」

しかし、もう遅かった。

ニナ「まったくあの3人今度はまた何かやり始めたわ・・・あなっ！はあっ！」

振り向いたニナは、驚愕した。

ガンダムタイプのハッチが開き、士官が中に入ろうとしていたのだ。

二ナ「何してるの！！ハッチを閉めて降りなさい！！」

すると、士官は振り向いて

????「フッ」

と言って、ガンダムタイプに乗り込んだ。

二ナ「誰よあれ！！」

二ナは、いてもたってもいられず、ガンダムタイプのところへと向かった。

コウ「なんだ？」

キース「どうした？」

ランド「こりややばいって！」

すると、2号機は、ケーブルを千切り、動き出した。

二ナ「誰かつ！誰か2号機を止めて！！」キース「なんだ？なんだ？」

ランド「嘘だろ！こんなの」

コウ「くっ！」

キース「お、おいコウ！」

すると、コウはもう一機のガンダムに向けて走り出した。
そして、ガンダム1号機のハッチをあける。

モーラ「ウラキ少尉！他の人を呼ぶわ。あなたじゃ！！」

コウ「僕だってパイロットだ！」

モーラ「今救弾中よ。すぐには出せないわ。」

コウ「急いでください」

二ナ「2号機のパイロット。聞こえてるでしょ？今すぐに降りれば、罪は軽いわ！今すぐに降りなさい！」

????「この機体と核弾頭は頂いていく。ジオン再興のために！」

このモバイルスーツデッキにいた全員が驚愕した。

二ナ「っ！？」

コウ「ジオンだと！？」

2号機は、ビーム・サーベルを使い、ペガサス級のハッチを切り裂き、飛び出した。

キース「嘘だろ！俺は大尉のところに行ってくる。ランド！行くぞ！」

ランド「キース・・・先にいっててくれ・・・俺はこいつで出る」

ランドはそういつて、パワード・ジム改を見上げた。

キース「えっ！わかったよ。わかりましたよ。俺1人で行くよ」

そういつて、キースはジープで飛び出した。

すると、1号機も歩き、ハッチを飛び出す。

ランド「こいつは動きますか！？」

モーラ「貴方まで！？・・・救弾はすぐ済むわ！」

ランド「わかりました」

ヒュルルルルルル・・・

・・・

・・・

チュドドドドドドドドド

チュドドドドドドドドド

チュドドドドドドドドド

キース「今さらジオンが何しようってんだよぉー！」

基地一面に、ミサイルが降り注ぐ。当たり一面は、とても、終戦しているとは思えない惨状だ。

連邦兵士「カークス、キース急げ！」

バニング「模擬戦じゃないぞ！みんな気を引き締めて行け！」

キース「大尉！ジオンが核弾頭装備の2号機を奪って行きました！」

カークス「ジオンだと！あいつらまた戦争をやる気なのか！何人殺せば気が済むんだよ！」

バニング「いそぐぞ！」

そういつてパイロット達はモビルスーツに乗り込む。

ガシヨン

パワード・ジムが格納庫から飛び出す。

すると、そこへ、バズーカが飛んでくる

アレン「！？」

パワード・ジムは、間一髪で避ける！

後続のカークスのザクがマシンガンを構える。

カークス「うわあああああー」

マシンガンをめちゃくちゃにうち始める。

ドムが迫って来ていたからだ。

しかし、手練れのパイロットにそんなものが通じるわけもなく、胴体を一閃され、地面に倒れる。

キース「あ、あ、あ」

キースは実際の戦場を目の当たりに、震えていた。

???「ゲイリーか！作戦成功だ脱出する」

コウ「ここから出すわけにはいかない！」

すると1号機は、ビーム・サーベルを構え、2号機の前に立ちふさがった。

連邦管制官「基地北東より、別部隊確認、残った部隊は至急、指令部の防衛に当たられたし」

モーラ「増援！そんな馬鹿な！」

基地の北東にみすみす侵入を許してしまったのだ。

ランド「コウ・・・2号機を頼む・・・俺は、指令部の防衛に出ます！」

そして、パスワード・ジム改は、トリントンの激戦の中へと飛び出した。

ガンダム強奪（後書き）

えーっと・・・原作のままです？

このあとはランドの戦闘なので、ちよつと展開を買えます。

強襲部隊の別動隊を登場させたり、キンバライトには、まだたくさん
のモビルスーツがある。などです。

あと、カークスは生きてるかもしれないやられ方にしたつもりなの
で、何か意見あれば、お願いしますm（――）m

今、薬を飲んだので（睡眠導入剤）頭がおかしくなってます。

批判などはどうぞ自由をお願いしますm（――）m

その文だけ、自分の力になりますのでm（――）m

トリントン基地攻防戦（前書き）

エーッと・・・更新遅れてすみませんm（――）m
テストと、たちの悪い風邪にかかってまして？

それと、前回の後書きで暴走してしまいすみませんでしたm（――）
m

カークスは、本来死んでますが、出そうと・・・思ってます。

長かったのに、内容スカスカの駄文ですが、良ければお願いします
m（――）m

トリントン基地攻防戦

2体のガンダムは、互いに動かず、にらみあっていた。

???「ふっ・・・こしやかな真似を・・・邪魔をするな！」

ガンダム2号機は、先にビーム・サーベルを構え、ガンダム1号機に向かって、上段切りをする。

ガンダム1号機もなんとかビーム・サーベルを出し、受け止める。

コウ「えっ?うわああー」

しかし、ガンダム1号機は受けきれず、弾き飛ばされてしまう。

コウが応戦しようとモニターを見るが、既にガンダム2号機は視界にはいない。

コウ「ど、どこだ?」

すると、後ろから、ガンダム2号機がやって来て、ガンダム1号機をけりあげる。

戦いは、圧倒的だった。

連邦パイロット1「堕ちやがれ！」

ジム改が、前方から迫るドムタイプに向かってマシンガンを発射する。

ドムタイプは、左右によけながら、バズーカを発射してくる。

ジム改も横に避ける。

ドムタイプはジム改のよけた先に、バズーカを撃つ

連邦パイロット1「う、うそだあああー！」

ジム改は、反応仕切れず、連邦パイロットの絶叫と共に、バズーカの直撃を受け、爆発する。

ドムタイプはバズーカのリロードをしながら、物陰に隠れ次の敵に備える。

すると、そこに、ランドのパワード・ジム改が降りてくる。

ランド「よし・・・訓練通りやれば」

パワード・ジム改が降りた隙を狙って、ドムタイプはバズーカを発射する。

ランド「敵!？」

接近するバズーカに気づいたランドは、パワード・ジム改を飛び上げらせ、マシンガンの銃口をバズーカが飛んできた方向に向ける。

ランド「お、墜ちてくれえええー！」

半狂乱になりながら、マシンガンをドムタイプに向けて撃ちまくる。

ドムタイプは、建物の影に隠れ、それをやり過ごす。

ランド「ど、どこなんだよ・・・」

いつ襲って来るかわからない敵に、ランドはびくついてしまう。

すると、しびれを切らしたかのように、ドムタイプがサーベルを構えて、飛び出して来た。

ランド「うわあっ！くるなあっ！」

ランドはあわててマシンガンを撃ちまくる。

しかし、まともに狙っていないそれは、かすりもしない。

ドムタイプは好機とばかりに、サーベルを構え接近してくる。

ランドは当たらないマシンガンを撃ちまくる。

ランド「い、嫌だ・・・死にたくない・・・死にたくないよ」

ランドは泣きそうになりながら、機体を動かすのをやめてしまう。

ランドの頭の中では走馬灯の様に今までの思い出が浮かんできていた

そのなかでとある記憶を思い出すランド

ランド「（これって・・・あの時の・・・）」

それはランドが連邦軍に入るきっかけになったある記憶だった。

ランド「・・・死ねない・・・」

ランドはポツリと呟く。

そして、サーベルが胴体に迫る瞬間だった。

ランド「こんなことで、

死ねるかよおおー！」

ランドは叫びながら、パワード・ジム改を左に、緊急回避させる。

ドムタイプは、振りかぶったサーベルをかわされたことにより、バランスを崩す。

ランド「貰ったあああー！」

マシンガンを投げ捨て、パワード・ジム改は右手にビーム・サーベルを抜く。

そして、振り向いたドムタイプに向かって、頭から一直線にビーム・サーベルを降り下ろした。

ドムタイプは、何の抵抗も出来ずに、真っ二つにされ、爆発する。

ランド「はあっ。はあっ・・・や、やれたのか!？」

ランドは荒い息をしながら、その場に立ち尽くしていた。

すると、近くにいたジム改から、通信が入る。

連邦パイロット2「その機体。空いているなら、指令部の防衛に

来てくれ。、ドムタイプが数機接近しているらしい！」

ランド「わ、わかりました」

未だ混乱しているランドは、とりあえず指令部へと向かうのだった。

連邦パイロット3「くそ！すばしっこいんだよ！」

辺りをホバーで滑りまくるドムタイプに連邦のモビルスーツ隊は苦戦していた。

連邦パイロット3「弾切れ！？ヤバい。早く・・・う、うわああああああああー！！！」

リロード中を狙われ、ジム改はバズーカの直撃を受け、撃破される。

連邦パイロット4「くそっ！なんなんだよこいつらあ！」

別のジム改がすかさずバズーカを撃つがドムタイプは軽くかわす。

連邦パイロット4「ちくしょうっ！来るなあ！」

ジム改は、続けてバズーカを撃つが、ドムタイプは、軽くかわし接近してくる。

ドムタイプはサーベルを抜き、構える。

連邦パイロット4「くそおおー!!」

連邦パイロットが叫び、ドムタイプが振りかぶった瞬間だった。

???「うわああああああー!!」

ズドドドドド

空から、弾が降り注いだ。

ドムタイプは、避けるまもなく、蜂の巣にされ、ズシンと重い音をさせ倒れる。

連邦パイロット4「な、何が!？」

連邦パイロットが驚いていると、1機のジムタイプが降りて来た。

連邦パイロット4「た、助かった・・・感謝する」

ランド「い、いえっ!ランド・シュバイツ准尉!援護に参りました。

」

連邦パイロット4「ああ、敵はいまだに基地に侵入してきている。かなりの数だ。ガンダムの奪還も大事だが、基

連邦パイロットが言い終わる前に、バズーカの弾頭が飛んでくる。

連邦パイロット4「ちっ!とにかく迎撃するぞ!」

ランド「り、了解です!」

ランドは荒い息をしながら、敵を探す。

ランド「（頼む・・・来ないでくれ!）」

しかし、無情にも敵はやってくる。ドムタイプが3機だ。

ランド「うわあっ! 何で来るんだよ・・・そんなに無駄死にしたいのかよおおー」

ランドは狂ったようにマシンガンを撃ちまくる!

ランド「当たれ・・・当たれ・・・当たってくれええええー」

偶然にも、マシンガンがドムタイプの足に当たり、ドムタイプはバランスを崩し倒れる。

相当なスピードだったのか、そのまま滑り、辺りの建物に突っ込み爆発する。

ランド「やれたっ! つ、次だ!」

連邦パイロット4「ようし、全機撃ちまくれ!」

号令と共に、指令部周辺にいた3機のジム改が1機のドムタイプに向けてマシンガンを撃ち始める。

3方向からの攻撃で、ドムタイプは蜂の巣にされ爆発する。

連邦パイロット5「やった・・・っ!」

しかし、喜ぶ暇もなく、接近したドムタイプに撃破されてゆく。

連邦パイロット6「誰か・・・誰かたすけっ！・・・」

悲鳴と共に、3機のジム改は撃破される。

ランド「くそおっ！ここまでなのか！」

???「はっ！墜ちな！」

渋い声と共に、ドムタイプのよこからマシンガンの弾が飛んでくる。

ドムタイプは、いきなりの攻撃で反撃出来ず、撃破される。

カレント「これで全部か・・・こちらカレント。無事か？」

ランド「た、隊長！」

カレント「んっ？ランドじゃねえか？何でそんな機体に・・・」

ランド「あっ・・・いろいろありまして・・・」

すると、もう1機ジム改が接近してきた。

???「おいおい。落ちこぼれランドじゃねえか。なんだ、生きてたのかよ。」

ジム改から、見下すような声が聞こえてくる。

ランド「その声・・・アストンか!？」

アストン「ああ、エリートのアストン様さ。俺は既に2機のゴミど

もを撃破してるんだぜ。」

ランド「はんっ、威張りやがって！」

アストン「うるせえ！落ちこぼれはさっさと帰りな！邪魔なんだよ！」

2人が口論をしていると、見かねたカレントが仲介に入って来た。

カレント「てめえらしい加減にしやがれ！戦闘中なんだぞ！」

ランド「わ、わかりました。すみません・・・」

アストン「ちっ、了解」

カレント「よし、敵はおそらく逃げ帰ったんだ。情報が入り次第、ガンダム2号機を追うぞ！」

ランド「了解です」

すると急に、

ヒュルルルルルル

と言う音になり・・・・・・指令部が派手な爆発により吹き飛んだ。

ランド「なっ！」

指令部の瓦礫が降ってくる。

カレント「ちっ！逃げろ！」

全機は、いそいで、指令部から離れる。

瓦礫が降って来るものも、何とか全機無事だった。

ランド「な、なんなんだよ！これ！？」

ランドの目の前には、完全に崩れた指令部がある。

カレント「重モビルスーツか・・・派手にやってくれるな。」

ランド「ちくしょう・・・指令部が」

アストン「全く、派手にやってくれるよなあ」

ランド「なんだよその態度は！？人が沢山・・・沢山死んだんだぞ！？」

アストン「でっ？」

ランド「お前なあっ！」

ランドは激しい怒りを露にしている。

カレント「ちっ、落ち着け。アストンがどう思おうがどうでもいいいな？」

ランド「くっ・・・わかりました。」

ランドは渋々納得する。

アストン「了解・・・ま、そう言う事だ。さっさと追いましょうぜ。」

カレント「ああ。だが、情報がなあ」

すると、通信が入ってくる。

オペレーター「バニング小隊が、ジオンの輸送機を撃破。敵は海岸沿いです。カレント小隊は至急向かってください。」

カレント「わかった。カレント小隊。行くぞ」

アストン「了解」

ランド「了解です（バニング小隊って・・・コウ達か？無事で居てくれ。ただ・・・それよりも、アストンは何か・・・）」

ランドは、アストンのジム改を睨みながら、出発するのだった。

く?????

1人の男が、もう1人に何か報告をしている

????「予定通り、奴らが動き出しました。閣下」

「???」うむ。我々の理想のため、そして地球圏の未来・・・のた
めにな」

そういった男の顔は薄い笑いを浮かべていた。

トリントン基地攻防戦（後書き）

相変わらず駄文ですいませんm（――）m

これから、テストがありますので、更新遅れますm（――）m

あと、モノアイガンダムズから、すこしパクリます。

といっても、変わらず駄文からは変わりませんが・・・

あと、主人公の機体がジムタイプばかりなのは・・・自分がジム

ガンダムだからです？

もし良ければ、これからも生暖かい目をお願いしますm（――）m

霧の中の攻防（前書き）

更新遅れてすいません>（――;）<

補習をかけたテストの最中でして？

短いですが、とりあえず更新だけしようと思ひまして？

霧の中の攻防

ガシヨン・・・ガシヨン・・・

4機のモビルスーツが、霧に包まれた海岸線を進む。視界は悪く、目の前を歩くジム改がわずかに見える程度だ。

ランド「な、何も見えませんね・・・」

カレント「ああ、この霧じゃあなあ」

カレントは、露骨に機嫌を悪くしながら言った。

カレント「バニングの奴がへまさえしなけりやな」

事を知っているランドは、さりげなくフォローを入れる。

ランド「今さら愚痴ったってしょうがないですよ」

アストン「実際そうじゃねえか。ま、新米少尉どのじゃ、ガンダムを乗りこなせる訳ねえか」

アストンが、火に油を注ぐような事をいつてしまう。

ランド「アストン！お前なら、2号機を止められたのかよ？」

アストン「ああ、余裕だな。主席の俺にかかりやあ、ちゃっちゃんと片付いてるよ」

アストンは、何かと仕官学校の時の話を持ち出し自慢をしてくる。

ランド「うるさい！これは実戦なんだ。模擬戦とは違っんだよ！」

アストン「はん。俺は将来連邦のトップに立つんだ。実戦なんか余裕さ」

ランド「お前！」

カレント「黙りやがれ！敵さんがすぐそこまで来てるかも知れねえんだぞ！」

見かねたカレントが仲裁に入ってくる。

ランド「あつ！了解しました」

アストン「はいはい。わかりましたよ（このロートルが）」

2人は渋々了承し、辺りの警戒に移る。

視界は、悪く、レーダーまでもが使えない。
ミノフスキー粒子が散布されているのだ。

ランド「どこだ・・・どこにいるんだよ・・・」

ランドは、まだ怯えている。
見えざる敵というものは、誰でも怖い物なのだ。
それが、新兵なら、尚更である。

アストン「・・・・・・・・・・」

さすがのアストンも黙っている。

カレント「提示連絡。こちらカレント。霧は深くなる一方だ。・・・
・・・へっ、バニングのスケベやろくに手柄をわたすかよ！」

カレントがぼやく。

その瞬間だった。

ジュワッ

と、いう音になり、1機のジム改が倒れる。

ランド「て、敵!!どこだっ!?!」

辺りを見回すが、敵の姿を見えない。

カレント「ランド!!後ろだ!!」

ランド「えっ!うわあっ!!」

ランドはあわてて振り向く。

すぐそこまで、2号機がビーム・サーベルを構え接近してきていた。

ランド「く、くそおっ!!」

ランドはビーム・サーベルを構えようとする。

しかし、2号機のタックルによって、手にしたビーム・サーベルを
落としてしまう。

ランド「嘘だろ!!こんなあっ!!」

武器を無くしたパワード・ジム改に2号機は、切りかかる。

カレント「くそやろうが!!」

カレントのジム改が、2号機にタックルを仕掛ける。

のけ反った2号機は、一旦下がり、ビーム・サーベルを構え直す。

ランド「た、隊長」

カレント「ランド。生きてるか？」

ランド「な、何とか」

ランドは震えながら、それに答える。

カレント「アストン！ランド！援護しろ」

カレントはそういうと、ビーム・サーベルを構え、2号機に迫る。

アストン「はいよ」

ランド「了解！」

パワード・ジム改とジム改はマシンガンを構え、2号機に向かって撃ち始める。

2号機は臆することなく、巨大なシールドでそれを受け止める。

マシンガンごとくでは、傷をつける事すら出来ない。

ランド「なんだよあのシールド!？」

ランドが、わめいている内にカレントが懷に飛び込む。

カレント「頂いたぜ!!」

ビーム・サーベルを構え、2号機に向かってふりおろす。
誰もが勝利を確信していた。

しかし、2号機は、大型スラスターをジム改に向かって、噴射した。

カレント「なっ!しまっ」

カレントの視界が見えなくなり、一瞬怯んだ時だった。
ビーム・サーベルが一閃し、ジム改の胴体を切り裂く。

ランド「カレント隊長おおー!!」

ランドの絶叫と共に、ジム改は、爆炎をあげながら倒れる。

ランド「う、嘘だろ?隊長が・・・そんな・・・!？」

ランドが衝撃を受けている間に、2号機はビーム・サーベルを構え
接近してくる。

ランド「く、くそっ!」

何とかビーム・サーベルを出し、それを受け止める。
ジジジジジジ

お互いに、ビーム・サーベルで鏖迫り合いをする。

しかし、出力で劣っているのか、次第に押されていく。

ランド「このままじゃあ・・・」

アストン「援護してやるよ」

いつの間にか2号機の横合いに回り込んでいたアストンが、2号機に向かってマシンガンを発射する。

ランド「今だ！」

2号機が怯んだのを見計らって、ランドはパワード・ジム改を飛び上げた。

しかし、2号機はそれを見逃さず、ビーム・サーベルを振るってくる。

ランド「！？ヤバイっ」

あわてて避けようとするも、反応仕切れず、両足を切られてしまう。

バランスを崩したパワード・ジム改は、そのまま、地面に落ちる。

ランド「うわああっ！！・・・う・・・う・・・」

ランドはそのまま意識が遠退いていくのを感じていた。

く???く

「???」閣下、今のところは、すべて予定範囲内で進んでおります。
」

「???」・・・順調なようだ・・・これでコーウェンも終わりだ・
・フフフ」

霧の中の攻防（後書き）

相変わらずの駄文ですいません> (´・`・´)
<

次回は、ネタバレかも知れませんが、コウVSモンシアならぬ、ラ
ンドVSモンシアを書くことと思ってます。

テストの最中なんで、また更新遅れます> (´・`・´)
<

出撃アルビオン（前書き）

コメントいただき、嬉しかったので衝動書きしてしまいました？
資料がなく、うる覚えの記憶でかいたので、間違いまみれだと思います？

あと、良ければコメントお願いします> (;) <
必ず答えて、少しでも改善していきますので？

出撃アルピオン

ランド「う．．．こ、ここは．．．？」

ランドが目をさますと、眼前にはテントの天上が広がっていた。

キース「お、目さましたか」

ランドは、若干痛む頭を抱えながら、キースに向かって話しかける。

ランド「キース．．．俺は何で．．．あつ！2号機に負けて！2号機はどうなったんだ！？」

すると、キースは途端に表情を曇らせながら、話始めた。

キース「2号機は核弾頭ごと盗まれたよ。俺もコウも、バニング大尉まで何も出来ず負けたんだ」

ランド「！？ば、バニング大尉がか？何て奴だ．．．」

いくら機体性能が違うとはいえ、基地のNo.1が簡単に負けるなどとは思えないのだ。

すると、キースは先ほどよりも、さらに暗く、怯えた表情になった。

キース「だって．．．だってよ．．．」

ランド「お、おい！？何があつたんだ！？」

キースの怯えように、ランドも動揺してしまう。

キース「2号機のパイロットは、あの『ガトー』なんだぜ」

ランド「ガトー……うそだろ！ガトーって、まさかソロモンの悪夢『アナベル・ガトー』！？」

ランドは今までにない程の声を張り上げる。

『アナベル・ガトー大尉』

ドズル中将貴下、宇宙攻撃軍所属。

ジオンがソロモンから撤退する際、専用のリックドムを繰り多数の戦艦、モビルスーツを撃破した事により、両軍から、ソロモンの悪夢と恐れられたエースパイロットである。

ア・バオア・クー戦以降の消息は、不明である。

キース「ああ、あのガトーさ。お陰で基地の戦力はズタズタさ……生きてるのが不思議過ぎるくらいだよ。あのガトーとやりあったつてのにな……」

ランド「（2号機のパイロットがガトー！？あんなのと俺は戦ったのか！！俺、いきてるよな！？夢じゃないよな！？）」

ランドはそう思いながら、頬をつねる。

ランド「いてえっ！・・・ゆ、夢じゃない・・・俺は・・・生きてるんだ！！」

キース「お、おい。いきなりどうしたんだよ？気でも狂ったのか？」

ランドの突然の奇行に驚き、キースはそう訪ねる。

ランド「い、いや。大丈夫さ。生きてるのを喜んでるだけさ。」

キース「そうか・・・そうだよな！」

「ハハハハ」と2人で笑い合う。

キース「ん？何か忘れてるような・・・あーっ！早くバニング大尉に知らせないと」

キースは突然立ち上がる。

ランド「な、なんだ？」

キース「コウとモンシア中尉・・・補充兵が戦ってるんだよ！？」

ランド「ぶっ！？な、何で!？」

あまりにも突拍子すぎて、ランドは吹いてしまう。

キース「1号機のパイロットの座をかけてだよ！？本当は大尉探してたんだけど、お前が目を覚ましたから。俺、バニング大尉探してくる」

ランド「あ、ああ、わかった」

そう言って、キースは飛び出して行って、しまった。

ランド「コウだってガトーと戦ったのに、俺は何てさまだ・・・俺だって・・・やれるよな?・・・」

ランドは何かを決意しかけながら、モビルスーツのハンガーへと向かった。

ランド「よし・・・今だ!」

整備兵がいらないのを確認して、パワード・ジム改のコクピットへと走る。

整備兵「お前?・・・何してるんだ!?!」

ランド「ヤバい!気づかれた!」

ランドは急いで、パワード・ジム改のシートに座ると、機体を起動させる。

ランド「えーっと、・・・で、敵影が見えたんですよ。偵察に行きます!」

このセリフが後の問題児と被るとは、ランドは夢にも思わないであ

ろっ。

整備兵「おい、待つ」

整備兵が言い終わる前に、パワード・ジム改を動かし、ペイント弾とシールドを掴み、ハンガーを出る。

回りに人がいないのを確認すると、バックパックを吹かせた。

ランド「うぐぐっ！な、何て推力だ！！」

ジム改の比ではない推力に戸惑うランド。

ランド「ま、前はそこまで使わなかったからな・・・模擬戦か、行くとしたら・・・試験場だな」

ランドはパワード・ジム改を、試験場へと向かわせるのだった。

ランドが出ていってすぐに、ハンガーの整備主任がかえってきた。

整備主任「おい、ここにあったジムタイプどうした？」

整備兵「それが・・・偵察にでるって・・・」

整備主任「なんだと？まだ足が直し掛けなんだぞ！ショック・アップソーバーももう替えがないのに・・・壊すなよ・・・」

整備主任はそう祈るしかなかった。

ランド「もうちょっとだ・・・見えた!」

ランドの前方に戦っていると思われる2機のガンダムとジムタイプが、見えた。

ランドは、パワード・ジム改を近くに停めてあるジープのそばにおろした。

ベイト「なんだこりゃ?」

アデル「ジムタイプのカスタム機ですね」

ニナ「パワード・ジム改・・・誰が?」

ランド「今どうなってるんですか?」

足元にいるニナに気付いたランドはそう訪ねる。

ニナ「えっ、ああ、よくわからないのよ。残骸の中にいるから。」

ランド「そうですか・・・」

すると、残骸の壁を突き破りガンダムとジムタイプが飛び出してくる。

モンシア「お、俺がまけたのか?」

コウ「はあっ、はあっ。やれたのか？」

ベイト「モンシア！何やってんだよ！」

ベイトは呆れた顔をしながら、通信機に話しかける。

モンシア「くそっ、くそっ・・・おい、そのモビルスーツ!!」

ランド「はいっ!？」

モンシア「またガキか！俺がガキに負けるわけが・・・おい、俺と勝負しろ!!」

声から、まだ若いと悟ったのか、モンシアは勝負を吹っ掛けてくる。

ランド「ええっ!？そんな!？」

モンシア「うるせえ」

モンシアは怒りに任せて、マシンガンを撃ってくる。

ランド「避け・・・れるかよ!!」

足元の3人を庇い、シールドでペイント弾をつける。

ベイト「モンシアあ！あぶねえだろ!!」

モンシア「うるせえんだよおおお!!」

モンシアはさらにマシンガンを乱射してくる。

ランド「・・・しろ」

モンシア「ああっ？」

ランド「いい加減にしろつつつてんだよおおー！！」

何かのスイッチが入ったのか、ランドは絶叫しながら、パワード・ジム改をジムタイプに突っ込ませる。

モンシア「何いいー早い！」

思いもよらず、高機動なパワード・ジム改にモンシアは驚きを隠せない。

モンシア「だがな、単純なんだよ。新米ごときにやられるか！」

ジムタイプはパワード・ジム改の攻撃を横に軽く受け流す。

ランド「うわっ！」

体勢を崩したパワード・ジム改にジムタイプは好奇とばかりにマシンガンを撃ちまくってくる。

ランド「しまった。マシンガンが！？」

マシンガンにペイント弾があたり、パワード・ジム改は、マシンガンを落としてしまう。

モンシア「バカが。おらおらあ！！」

ジムタイプは、攻撃の手を緩めず、接近してくる。

シールドでうけることしかできないパワー・ジム改は、次第に追いつまれて行く。

ランド「・・・俺は・・・また・・・」

ランドは敗北を覚悟し、うつむく。

モンシア「新米が！情けねえなあ？何で軍人になったんだよ！」

ランド「くそっ、くそっ。くっそおおおー」

やけくそになりながら、パワー・ジム改を飛び上がらせる。

モンシア「なっ！？」

ジムタイプもあわててマシンガンを撃つが、パワー・ジム改の推力についていけない。

ランド「うわあああー！！」

ランドは絶叫しながら、パワー・ジム改を・・・・・・・・・・ジムタイプに足から落とした。

モンシア「何iiiiiiiiー！！うおわっ！」

高高度からの落下の衝撃はすさまじく、ジムタイプの胴体がひしゃげる程だ。

ランド「今だ!？」

隙ができたジムタイプのマシンガンを奪い取り、ジムタイプに突き付けた。

モンシア「いててっ!・・・何っ!また俺がまけたのかあ!？」

モンシアは愕然とし、ジムタイプのレバーから手を離した。

ランド「はあっ、はあっ、や、やれた・・・のか?・・・あ・・・あ・・・」

ランドはもはやまともに喋ることすら出来なくなっていた。
本気の戦闘の恐怖に怯えきってしまったからだ。

あたり一面が、静寂に包まれる。

バニング「お前ら!何をしている」

その静寂を打ち砕くかの様に、バニングの怒号が響く。

コウ「た、大尉!」

バニング「全く・・・おい、お前らは基地に戻れ!後の事は俺に任せろ!

全員「はい・・・」

そうして、全員は基地へと戻るのであった。

ハリダ「一週間の独房入りだよ。いいね？」

コウ「はい」

コウはそう言って、独房にはいる。

キース「コウ・・・」

キースが心配そうにコウをみる。

ハリダ「そうだ。君は、追撃部隊に志願するのかい？」

ハリダは、ランドに対して、聞いてくる。

ランド「俺は・・・志願します。独房にも入ります。」

ランドは真剣な顔をして答えた。

ハリダ「わかった。手続き等の書類は後で持ってくるよ。同じく一週間だよ。」

ハリダは淡々と告げた。

ランド「はい。」

そう言って、ランドも独房へとはいる。

ランド「（俺にだって・・・やれる事があるはずだ・・・）」

ランドはそう思いながら、ベッドへと寝転ぶのだった。

この日、強襲揚陸艦アルビオンは、アフリカへと出発した。

出撃アルビオン（後書き）

駄文度8割増しですいません>（―――;）<
次回は、アフリカでのジオン残党との戦い・・・の予定です。
本当は10機しか敵機はいませんが、少し増やします。
テストと補習があるので、かなり更新遅れます>（―――;）<

遭遇（前書き）

更新遅れてすいません>（――；）<
結局補修になってしまいました？

かなり急いで書いたので、いい加減になってるかも知れません。
ご指摘、感想あれば遠慮なくください・・むしろ、遠慮なんか捨てて、何でもいいのでコメントお願いします？
かならず返信いたしますので>（――；）<

遭遇

アルビオンがアフリカを目指して、早一週間。

未だに、何も進展がないまま、時は過ぎ去っていくのであった。

ランド「・・・今日も進展無し、と」

ランドが夕食を食べながら、そう呟く。

アストン「たくよ。いつになったらみつかんだよ!」

アストンもそれに答える。

ランド「まあまあ、落ち着けよ。」

ランドがそれをたしなめる。

アストン「うるせえ!こんなことなら、志願すんじゃないよ!」

アストンは机を叩くと、そのまま食堂を出ていってしまふ。

ランド「(じゃあなんで志願したんだよ・・・)」

ランドは心の中でそう思う。

実際、アストンが追撃部隊に志願したのは驚きであった。

エリートの家計で、高い操縦技術を持つアストンなら、志願などしなくても良いはずなのだ。

ランド「(まっ、エリートさんは何を考えてるか解らないしな・・・)」

特に気にする事もなくランドはそのまま夕食を再開したのだった。

「ハンガー」

損傷したモビルスーツや、改造途中の機体を前に、
モーラが整備員に声を掛ける。

モーラ「パワード・ジム改はF系のパーツを流用して・・・」

そこに偶然やって来た二ナが、声を掛ける。

二ナ「モーラ。偵察機なら、さらにスナイパーのスコープも取り付けたら？倉庫からもってきたんでしょう？」

二ナの提案にモーラが飛び付く。

モーラ「そりゃいいね。改造しがいがあるよ！」

モーラが笑顔でそう語るが、整備員の顔は、げんなりとしている。

整備員「主任、これじゃガンダムの為のデータとれませんよ？」

改造しすぎたパワード・ジム改に対して、整備員が口を出す。

モーラ「データもなにも死なれちゃまずいでしょ？ベースが貧弱なんだから、少しでも強化しないと。」

モーラの最もな提案に整備員も黙る。

モーラ「さあて、今夜は徹夜だよ。いつ敵が来るかわからないんだからね。」

整備員一同「（マジですか・・・）」

二ナ「ほどほどに頑張ってね。あたしもガンダムの整備しなきゃ」

二ナも、自らのガンダムの整備を始める。

こうして夜はふけて行くのであった。

～次の日～

シナプス「ランド准尉。直ちにブリッジへ来てくれたまえ。」

ランド「ふえっ！」

未だ自室で寝ていたランドは、呼び出しの通信で目を覚ます。

ランド「ふあ・・・着替えて行くか・・・」

眠たい目を擦りながら、ランドは着替え、ブリッジへと向かうのだった。

ランド「シナプス艦長、何かご用でしょうか？」

そう言って、ブリッジへと入る。

シナプス「うむ。ここから先は、ジオン残党がうろついていると言われている。そのため、偵察を出せねばなんのだ。君は、パウ・ド・ジム改ででくれたまえ。」

ランド「了解です。しかし・・・」

何か分の悪い顔をするランドに対して、シナプスは、悟ったように声を掛ける。

シナプス「朝食の後で構わんよ。すでにウラキ少尉も出ているのでな。多少の余裕はある。」

ランド「あ、ありがとうございます、艦長。失礼します。」

ランドは、朝食を取れないという不安をなくし、ホッとしながらブリッジを後にするのだった。

アストン「ランド」。偵察だつて？ま、お前にはそれくらいしか出来ねえよなあ。ハッハッハッハ。」

朝食を終え、ハンガーへと向かうランドにアストンが茶々を入れてきた。

ランド「う、うるさい。偵察だつて大事なんだよ！」

アストン「はいはい。ま、頑張れや」

アストンは聞く耳持たずといった感じで、立ち去る。

ランド「（アストンの奴！いつか仕返しを・・・無理か・・・）」

早くも諦めながら、ランドはハンガーへと向かうのだった。

（ハンガー）

ランド「おいおい・・・」

ランドはあきれながら、自らが乗る機体を見上げていた。

モーラ「お、ランド。どうだい、この機体は。」

モーラは自信満々にパワード・ジム改を見上げる。

ランド「いや、どうって言われても・・・」

ランドは口を濁す。

それもその筈だ。

パウード・ジムの頭には、ジム・スナイパー？のスコープがつけられ、胴体にはウェアラブルアーマーがつけられ、足のショックアブソーバーも変わっていたのだ。

ランド「・・・・・・・・・・」

ランドは言葉を失う。

モーラ「まあ。とりあえず乗りな。出撃するんだろ？」

ランド「あ、はい。」

訳もわからぬまま、ランドはパウード・ジム改に乗りカタパルトに立つ。

モーラ「あ、そうだ。足はホバーだから、操縦気を付けなよ。」

ランド「えっ、ホバーって・・・」

ランドが言い終わるまえに、カタパルトによりパウード・ジム改は射出された。

ランド「ぐおおお！」

射出されたパウード・ジム改は、荒野に着地する。

ランド「ふう。ホバーって・・・とりあえず進むか。」

言われた通りホバーのスイッチを入れ、進もうとする。

ランド「うおわっ」

慣れない動きに、転倒してしまう。

モーラ「気を付けなよ。機体を少しまえに、倒すんだ。」

ランド「わ、わかりました。」

モーラの助言に従い、機体を少しまえに、倒す。

ランド「うわっ、早い！」

パワード・ジム改は地面を滑るように進む。

ランド「こりゃすごい！まるでドムだな・・・こちらランド、偵察に向かいます。」

シモン「了解。気をつけて」

通信を終えると、さらに加速し、対にはアルビオンの視界から、消える。

ランド「敵機は無し、と。」

辺りを見渡すと、レーダー類の計器をチェックする。
レーダーにも、機影は確認出来ない。

その時だった。

ピーッ、ピーッ

アラートが鳴り響いた。

ランド「敵！？9時方向から！」

9時方向・・・左から、バズの弾頭が接近してくる。

ランド「こ、こちらランド、敵と遭遇しました。・・・ザク、ドム2機！ヤバイです！早く援護をっ！！」

シモン「准尉！直ちに増援を送ります！」

ランド「了解！！くそおっ」

シモンとの通信を終えると、敵機に向かって、マシンガンの牽制射を行う。

それを軽くかわした敵機は、マシンガンを連射しながら、接近してくる。

避けながら、シールドで受ける。

ランド「消耗戦になったら負ける！！どうすればいいんだよおっ・・・」

トリントンの時のように、パニックを起こしかけてしまう。

ランド「・・・違う・・・あの時とは違うんだ！覚悟だつてしたはずなんだ！」

吹っ切れたランドは、パワード・ジム改を滑らせ、接近してきている敵機に向かわせた。

ランド「うわあああああー！！」

マシンガンを腰に付け、ビーム・サーベルを両手に構える。

そのまま敵機に向かって、突っ込む。

マシンガンが当たるが、ウェラブラルアーマーのお陰で、目立った外傷は見えない。

ランド「これでー！！」

接近してきていたザクとドムが、止まり、下がろうとする。

その間に入り、左右のビーム・サーベルで2機の胴体を切り裂き、通り過ぎる。

真っ二つになった2機は、切られた衝撃で地面に倒れ、爆発する。

ランド「い、今なら！当たれっ！」

右手のビーム・サーベルを捨て、マシンガンを構える。

こちらを向こうと、しているザクに向かって、マシンガンを発射する。

ザクは蜂の巣になり、倒れる。

ランド「や、やれ・・・」

ランドが言い終わる前にもう1機のドムが切りかかってくる。

ランド「！？くそおつ！あたれえっ！！」

切りかかろうとしているドムに向かって、とにかくマシンガンを超至近距離で打ちまくる。

マシンガンで蜂の巣にされたドムは、サーベルを落とし倒れる。

ランド「はあっ、はあっ、やれた？4機を相手に？マジか？俺、生きてるのか？・・・やったああー！！！」

ランドは、自問自答の後、とにかく喜んだ。『生きている』これ以上に嬉しいことは人にとってない。当然だ。

パワード・ジム改がハンガーに入る。

ランドが降りると、回りにいた人が駆け寄ってくる。

キース「すげえよ！戦果4だぜ」

コウ「ああ、しかも相手はドムだぜ！あの重モビルスーツを相手にして。」

皆が誉めちぎってくる。

ランド「ま、まあな。」

ランドも満更ではなかった。

シナプス「ランド准尉。直ちにブリッジに来てくれたまえ。」

朝と同じ放送が流れ、ランドは再びブリッジへと向かった。

くブリッジく

シナプス「戦果4。おめでとう。」

シナプスは素直にランドの戦果を誉める。

ランド「あ、ありがとうございます！」

ランドも素直に喜ぶ。

すると、シナプスは顔をしかめながら語りだした。

シナプス「敵は確かにここにいるようだ。一刻も早く2号機を見付けねばならん。君にも、更に偵察、戦闘を強いることになる。」

シナプスは、静かにそう語った。

ランド「……わかってます。志願するときに覚悟をしたはずですから……。」

ランドも静かにそう返答をする。

シナプス「そうか。とりあえず休憩をとりたまえ」

ランド「了解です。失礼します」

シナプスの好意を素直に受け、ランドはブリッジを出す。

ブリッジを出たところでモンシアが声を掛けてくる。

モンシア「覚悟つてのはそんな簡単に決まるもんじゃないぜ。よく考えるんだな」

いつものいい加減さを全く感じない。しゃべり方をすると、モンシアは立ち去ってしまう。

～ランドの自室～

暗くしてある部屋のベッドにはランドが寝そべっている。

ランド「（覚悟は・・・できてるはずだ。じゃなきゃ・・・）」

モンシアの台詞を思い出しながら、釈然としないまま、ランドは眠りに付くのであった。

遭遇（後書き）

・・・ジムなのに、強化しすぎましたね？

まあ、懲りずに強化しますが、（、・ω´・）b

アイデアなどありましたらお願いします>（|—|；）<

自分は全く創造力がなくて？

コメントくれた方々、本当にありがとうございますm（——）m

ものすごくやる気がです！！

駄文ですが、これからもよろしくお願いしますm（——）m

あ、これからの展開なんです、このまま、むさい路線でいくか、
厨二病学生の煩惱の展開を入れるか、迷ってます？

適当に意見などありましたら、お気軽にお願いしますm（——）m
深夜に書いたので、テンションおかしくなってるのは勘弁してください？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459y/>

機動戦士ガンダム0083—もう一つの星の屑—

2011年12月13日02時47分発行